

マルクスの貨幣論の成立に関する一考察

中尾, 訓生

<https://doi.org/10.15017/4071692>

出版情報：経済論究. 26, pp.1-18, 1971-07-01. 九州大学大学院経済学会
バージョン：
権利関係：

マルクスの貨幣論の成立に関する一考察

中 尾 訓 生

〈資本論〉の出発点の論理〈商品論〉において措定されているもの及びその方法を理解しようということが本稿で意図されていることである。これらの考察は「経済学全体系への接近のために導きの糸をあたえるということができなが他方その理解困難は全体系へのマルクスの接近方法がとらえられなければならない。」⁽¹⁾という性格を有する。ここでは、まず〈貨幣としての章・要綱・〉の諸論述を全体として統一している視点を摘出し、しかる後に〈商品論〉の検討に入ることにする。そこでかかる視点を摘出するために〈哲学の貧困〉の検討からはじめることにする。それは「我々の見解の決定的な諸点は、1847年私がブルードンにたいして公けにした〈哲学の貧困〉のなかにただ論争の形式においてではあるがはじめて科学的に概説されている」⁽²⁾ということだけではなくこの著作において我々はすでに獲得されている理論的枠組と後の理論展開への新たな課題をみわけることができるであろうと思われるからである。このことはリカードの労働価値説がブルードン批判のなかで果している役割を見出すというかたちで集約することができる。〈哲学の貧困〉は1章で経済学の、2章で哲学の批判がとりあつかわれている。ブルードンの哲学は諸範疇の発生を説明する役割を担っている。この「陳腐なヘーゲル主義」の批判は〈ドイツ・イデオロギー〉⁽³⁾ですでに表明されている歴史観によってその非歴史性を徹底的に暴露するというかたちでおこなわれている。⁽⁴⁾1章でマルクスによって理解されているブルードンの経済学は彼の哲学〈歴史的記述の方法〉⁽⁵⁾に照応して独特な内容、すなわち「立法」者的である。ブルードンの経済学とはブルジョア社会の内的機構を分析している経済学者（リカード）の諸範疇を「一切の現実に先立って存する永久的諸観念に変形し」「神の御胸」におさめてしまっている。⁽⁶⁾マルクスの批判はまずこれらの諸範疇をもとの場所にかえすことであった。これは具体的歴史的事実をブルードンの見解に対応させることによってなされた。⁽⁷⁾

次には当然のこととしてマルクス自身の課題となるわけであるが、(1)これら、もとの場所にかえされた現実の生産諸関係の表現としてある諸範疇を (2)ブルードン批判で獲得され、また(3)すでに獲得されている理論的枠組のなかで吟味するということである。そこでこれら(1)(2)(3)から引き出された諸課題の論理的関連を述べることによって一つの視点を抽出してみよう。(1)マルクスが依拠しているリカードの経済的見解、— (すなわち、労働力の「自然価格」は賃金の最低限と一致する、「リカード地代論」の受入れ、あるいは「剰余」が前提とされていること、商品としての金銀と貨幣としての金銀の区別をしたこと等々) —のうち、ここでいう個別課題とはリカードの抽象的次元における価値規定から現実の市場価格の変動を如何に説明するかということである。(2)、マルクスの批判はブルードン理論の立法者的性格に集中しておこなわれている。⁽⁸⁾ この立法者的性格を理論上において表現している概念が「構成された価値」である。これからの帰結として「先ず一つの生産物の相対的価値をそこに固定された労働量によって測れしからば供給と需要とは必然的に均衡を得るに至るであろう。生産は消費に対応するであろう。生産物は常に交換されるであろう。その日常価格はその価値をあらわすであろう。」⁽⁹⁾ そして同様の帰結として—ブルードンの大発見—「一つの有用な生産物は、その生産に必要な労働時間によって評価されるといつでも 交換において受けとられ得る。その証拠は私の (ブルードン) 望む『交換可能性』の状態にある金と銀とである。それ故金と銀、それは構成の状態に達している価値である。」⁽¹⁰⁾ ここでブルードンはひかえめながら神の「啓示者」として登場し「凡俗なる人々」⁽¹¹⁾に理性をはたらかせるように訴える。生産物を適正に評価しなさい。そうすれば需・給は一致し過剰生産はなくなるだろうと。また彼は次のように言う。諸君の理性は進歩している。その証拠に諸君は金・銀を喜んで交換において受取っている。これは金・銀に適正なる労働時間が固着していることを諸君は認めているからではないかと。だからさらに理性を発達させてすべての商品を金と銀の地位に引き上げるようにしよう。そうすれば恐慌はなくなるであろう。この (マルクスの理解している) ブルードンの主張の根拠は「経済的矛盾の体系の礎石である」「構成された価値」に存る。⁽¹²⁾

「構成された価値」とは効用価値と交換価値との総合としての生産費のことである。(ブルードンの理論においてはマルクスによれば次から次へと新しい言葉が創られていくところにその特徴がある。) 効用価値を供給とし、交換価値を需要とする。そして「総ての生産者をただ1人の生産者に総ての消費者をただ1人の消費者にこれら2人の架空の人物の間に」自由意志によって生産費が形成される。この生産者と消費者が登場することができたのはブルードンの便利な「歴史的記述的方法」のおかげなのであるがこれは結局経済学者が愛好するロビンソンが理論の出発点に想定されていたということである。しかしリカード理論に想定されていたロビンソンとは相違していることは、注意する必要がある。これはマルクスの次の叙述から判断することができる。「或る人の1時間が或る他の人の1時間とその価値が等しいといふべきではなくむしろ1時間の或る人が1時間の或る他の人と価値が等しいといふべきなのである。時間がすべてであって人はもはや何物でもない。人はせいぜい時間の骨組である。」⁽¹⁵⁾ マルクスはこのようにリカード理論の性格を明らかにするわけであるがここで想定されている人間は近代産業というまさしく歴史的に規定された人間なのである。ブルードンの想定した超歴史的な人間(ロビンソン)とは相違していることが知れる。ブルードンは現実の矛盾に出会うと「神の御胸」に逃げかえるのであるがこれは「セーヤンスモンディーが国民経済学の非人間的な結論とたたかうためには国民経済学から外へとび出さねばならなかった。」⁽¹⁶⁾ ことと照応している。それではブルードン、リカードともにロビンソンを想定したということの意味はどこにあるのか、ブルードンの想定した人間は天上より舞い降りてきてあらゆる歴史段階を自由に歩きまわる。それ故歴史認識に欠けるのであるがリカードの想定した人間はブルジョア社会以外を知らないが故にブルジョア社会もまた一つの歴史段階における社会形態であることを認識できない。これについてマルクスは極めて明快に述べている。「ブルードン君はブルジョア的存在が彼にとって永遠の真理であると直接には述べていない。彼はブルジョアの諸関係を思想の形で表現する諸範疇を神化することによってそれを間接に述べるのである。」そして又善良なブルジョア(リカード)も「ブルジョアの生産形態が歴史的で過渡的なものであることは封建的生産形態がそうであったのと全く同じであることを理解しない。この誤りは彼らにとってはブルジョア的人間があらゆる

社会の唯一の可能な基礎であるといふ事実から生じている。彼らはその中では人間がもはやブルジョアではなくなっている一つの社会を考えることができな
 いのである。」⁽¹⁷⁾

ミークはこの点が「リカード理論をのりこえることを可能にしたコペルニクスの転回である。」⁽¹⁸⁾と指摘しているが、これは経済学批判体系のうちに想定される人間がリカード的でもブルードンのためでもならないという意味においてである。序説〈要綱〉の冒頭においてマルクスが「社会のうちで生産しているもろもろの個人——したがってもろもろの個人の社会的に規定された生産が当然その出発点である。」⁽¹⁹⁾と述べているのは(2) (ブルードン批判) からの課題を示しているのである。

(3) エンゲルスの国民経済学批判は「私有財産」「競争」を基軸にして展開されているがエンゲルスの場合には感性的に把握されている「私有財産」をマルクスは「疎外された労働」という概念から「人間の外部にある事物を問題」にするのではなくて「人間そのものを問題にしなければならない。」と理性的に把握している。この把握はマルクスの研究を推進する源であり後の理論の核ともいべきものを形成することになる。さてマルクスが「疎外された労働」と「私有財産」という二つの要因のたすけをかりて「国民経済学上のすべての範疇を展開できる。」としてもその不充足性は明らかである。なぜなら「疎外された労働」は「類的存在」という人間観を念頭にして働けば働くほど貧困になるという現状のもとでの労働を規定して獲得されたものであるから、換言すると二要因のたすけをかりての経済学批判の理論展開のうちには「類的存在」はなんら規定されたものとして措定されていないから。⁽²⁰⁾ この欠陥についてはマルクスも意識しているところである。経済学批判を展開するまえに解決しなければならない課題の一つを「どのようにして人間は自分の労働を外化し疎外するようになるのか」と述べている。「類的存在」の確証としての労働と「疎外された労働」の両者の関連を(経済学批判の)理論のうちにかに措定するか、この課題はこれに続く叙述が示しているように「私有財産」を理性的に把握したことによって経済学批判を展開するまえに解決しなければならない課題ではなくて経済学批判の主要な内容となるのである。「我々はすでに私有財産の起源にか

んする問題を人類の発展行程にたいする外化された労働の関係という問題におきかえることによってこの課題を解決するために多くのものを獲得してきた。なぜかといえば私有財産について語る場合人間の外部にある事物を問題にしなければならぬと一般に信じられているからである。だが労働について語る場合ひとは直接に人間そのものを問題としなければならない。この新しい問題提起はすでにその解決をふくんでいる。」ここに人間そのものが対象であることが宣言されている。この「新しい問題提起」はマルクスの経済学の方法に関してみるならば「表象された具体的なものからしだいにより稀薄な抽象的なものにするまでいってついにはもっとも単純な諸規定に到達」する導きの糸となるべきものであろう。「疎外された労働」の規定あるいは「類的存在（本質的人間観）」をいかにして理論のうちに措定するかというこの課題は（ドイツ・イデオロギー）以降における理論的枠組を形成するものとなる。⁽²³⁾

二

これら(3)(2)(1)はそれぞれ<貨幣としての章>の背景にありあるいは直接の課題となっているものである。<貨幣としての章>でまずマルクスはブルードン主義者ダリモンの批判をして（リカード価値論からの）等価交換というこの理論上の想定は「実際には貨幣価格のうちに表わされておりただ隠蔽されているにすぎない」として「価値と価格の区別」から「価値関係が貨幣において一つの物質的なかつ特殊化された存在を どのようにし、またなにゆえに受けとるか」という新たな課題を提起するわけであるが、この課題の提起によってこれ⁽²⁴⁾までのマルクスの研究過程からの諸課題のうちの一つである抽象的次元における価値規定から現実の市場価格の変動を説明する課題をこの新たな課題が解決されて説明されるものとして後に残すのである。もちろん競争（価格形態）の基礎的規定というべきものはこの新たな課題のうちにふくまれていなければならない。さてその他の（(2)(3)からの）課題を背景にしてこの課題に立ち向うわけであるがその場合、次のことはこの課題を設定するさいの想定としてマルクスの念頭にある。（価値の実体は産業上の枢軸となっている単純なる労働（時間）であるということ）この想定は<草稿><経済学ノート>でリカードを評

価している面から導出されているのであってたんなる量的規定として想定されているのではないということに注意しなければならない。マルクスにとってこの課題は日常の諸現象としての流通形態 $W-G-W$ （棉花と油とはお互の欲望を満足させるために交換されている、すなわち使用価値が相違しているから交換されているという表象を与える）から G をいかにして理論的に獲得するかということであった。従来からの問題意識(2)(3)を背景にしてこの理論的想定と W と W を媒介する G を念頭にしてマルクスは棉花と油との交換内容の特徴は使用価値の相違にあるのではなくて棉花と油とがある共通性を有している点にこそ存するという事を見抜くのである。この交換の内容をたんに使用価値の相違ということに還元してしまえばそれはかつて批判したブルードンの交換価値の発生を説く方法（ロビンソンの想定）と同様のものになってしまうであろう。棉花と油とがある共通性を有するという事は商品所有者相互間において結ばれる関係ということを示している。所有者はまず自己の商品をある第三者で評価し、しかる後に相互の間で交換がおこなわれるということである。ここで「価値関係が貨幣において一つの物質的かつ特殊化された存在をどのようにし、またなにゆえに受けとるか」という課題は（貨幣の生成）の説明という課題と「価値関係」ということの意味についての考察という二つの課題を含むものとなる。後者の課題は前者の課題の背景にある(3)(2)という問題にふくまれるものである。マルクスにそって（貨幣の生成）の論理をみていこう。各々の商品とはちがった「この第三者はある関係を表現するからまず頭のなかに表象のうちに存在する。ちょうど諸関係が一般に関係する主体とは區別して確定されなければならない場合考えることができるだけであるように。」⁽²⁷⁾とまず関係を確定してこの関係（理論・考えられたもの）と現実の商品交換の矛盾から（貨幣の生成）を説明しようとするものである。「価値としてはどの商品も一様に分割できその自然的な定在ではそうではない。価値としては商品はどんなに多くの変態と実存形態をへめぐろうとも依然として同じままである。現実には商品はひとしくはなくいろいろの欲望体系に相応しているからこそ交換する。価値としては商品は一般的であり現実の商品としては特殊性である。価値としては商品はつねに交換可能であり現実の交換では商品が特殊の

諸条件を満たすばあいだけ交換可能である。……………⁽²⁸⁾。この価値(=関係)の一般的性質と現実の商品交換における制約としての特殊性からの(貨幣の生成)の説明は<経済学批判>においても変更されることなく深化されて展開される。ここで指摘しておかなければならないのは第三者(価値)の実体についてである。理論上の想定として価値の実体はすでに説かれているのであるがそれは量的規定として導出されたのではないということはこの論点の最初に注意しておいた。しかしながら商品交換のさいに問題となる交換比率はその商品に物質化されている労働時間によって決定されるとマルクスはしている。⁽²⁹⁾商品所有者は交換のさいに自己の商品をある第三者で評価するということが商品交換を特徴づけるものであることはすでに述べたところである。その際所有者(生産者)はこの第三者の実体が労働時間であるということを認識してお互にその交換比率を決定するのであろうか、マルクスは決してこんな想定をしているのではない。もしこのような想定をしているのであるならカード流のロビンソンを想定していることになる。むしろ所有者の意志、予見においては不等価交換を想定するのが正当であるだろう。マルクスが第三者を一般的労働とした一つの理由は次の点である。「自己の生産の余剰が偶然に他人の生産のそれと交換される物々交換は一般に生産物の交換価値としての最初の出現であり偶然の欲望によって規定されている。しかし物々交換が連続的な行為となるならば相互的生産の規制による相互の交換の規制が次第次第にはいりこんできてけっきょくいっさいを労働時間に解消してしまう生産費が交換の尺度となることであろう。このことはどのようにして交換が生成し商品の交換価値が生成するかを我々に示している。しかし一つの関係がまず出現する条件をなす諸事情は同じことをけっして、その純粋性においても総体性においても」(社会的象形文字)を説明せんとしている「我々にしめすことをしなかった。」したがって「交換価値として措定された生産物は一般的な関係を表わしている。」⁽³⁰⁾個別的で偶然的な関係が一般的、社会的な関係へ転化することを我々は(時間の流れのままに)歴史的に叙述することはできないのである。さらにこの関係が一般的なものとして措定されなければならないということを後者の課題に関連して述べてみよう。「一定の歴史的時期の社会的生産過程を前提にそこから出

発して分析しそれを総体として理論的に領有するという方法は⁽³¹⁾（先行する諸形態論）〔要綱〕ではまず各歴史段階の基礎である集団性（共同性 Gemeinwesen）の抽出ということのうちにみられる。「種族共同社会、自然的共同体は土地の共同体的領有と利用との結果としてではなくその前提としてあらわれている。」自然生的な集団では自己と集団は未分離でその再生産（土地への関係）は⁽³²⁾一体化している。次の段階では自己の再生産（土地への関係）は共同体（戦闘組織、等々）を前提としておこなわれる。ゲルマン的共同体（家族の集合の連合体）は家族の土地に対する関係には規制力を有さない。この段階では家族が前提としてあらわれる。これらの歴史段階に共通していることはその基礎である共同体成員の（社会的）連結が人格的（宗教、身分、血縁等々）依存関係によってなされているということである。マルクスの研究対象としている「近代市民社会」は封建的な身分制度がくずれ諸個人の自由な行動を前提としているような社会であった。経済学者達は諸個人の私的な利益を追求する自由な行動こそが社会全体の利益になると表現していた。マルクスの方法からすれば諸個人の（社会的な）連結の基礎をまず明らかにすることが肝要であった。（人格依存の社会形態）（物的依存の社会形態）という彼の歴史認識はこの基礎の表現としてある。諸個人の無関心な行動はある諸関係を形成しており、そして諸個人の行動は逆にこの諸関係への従属として現れる。「たがいに無関心な個人の相互的かつ全面的な依存性が彼らの社会的関連を形成する。この社会的関連は交換価値において現れている。」⁽³³⁾このようにマルクスによればこの諸関係は交換価値（貨幣）において現れているのである。「貨幣それ自体は共同体（Gemeinwesen）なのである。」⁽³⁴⁾この意味において交換価値をまず措定することは、「近代市民社会」の基礎を措定するということなのである。

商品交換の内容の特徴を所有者が自己の商品をある第三者で評価することによって交換をおこなうということのうちにみたことはすでに述べたとおりである。したがって交換価値を措定するということは社会的に規定された人間を、すなわち価値関係のにない手としての人間を措定するということである。(3)2の問題領域はここで（貨幣の生成）を説明するということのうちに焦点をしばってあらわれてきたということが出来る。しかしまだ 不十分な点を残してい

る。(先行する諸形態)での本源的所有論には彼の人間観は不可欠なものである。そして「自然生的な意識」が「まわりの諸個人と結合関係にはいらざるを⁽³⁵⁾えない必須性の意識」「人格的依存の社会形態」に転化するのを規定したのは「永遠の自然必然性」としての労働という合目的・目的意識的な生活活動にはかならない。⁽³⁶⁾したがって社会的に規定された(価値関係のない手としての)人間は他面ではこの諸関係を否定する人間(類的存在)として措定されていなければならないということになる。このようにしてこそ(物的依存の社会形態)での高度に発展した生産力を基礎にして第三段階の自由な個人の人格的依存関係の社会を展望することができるのである。

<要綱>での(貨幣の生成)を説く方法は<経済学批判>においてもそのまま入り入れられているが<要綱>でのスミス批判がここではエスカレートされて(貨幣の生成)を説明する論理(価値(=関係)⁽³⁷⁾と現実の商交換の矛盾)につけ加えられて使用されるという(ここでは叙述の仕方に意を用いているという意味においては)混乱を示している。このことはさらに(労働の二重性)に関する把握が「交換価値が労働時間によって規定される」という量的規定の強調⁽³⁸⁾ということとなつてあらわれている。スミスが交換過程(W-G・G-W)を二つにW-GとG-Wに分解することによって生産者は特殊な商品(W)とともに一般的な一商品(G)を生産しなければならないとしたことをマルクスは一般的な一商品(G)を生産するということは一般的な生産を前提しているということであると批判するわけであるがこの批判がここではエスカレートして「そこで新たな困難が生じる。すなわち一方では諸商品は対象化された一般の労働時間として交換過程にはいりこまねばならないのに他方では諸個人の労働時間が一般の労働時間として対象化することそれ自体が交換過程の産物にほかならぬのである。」⁽³⁹⁾というように(貨幣の生成)を説明するために使用されるのであるが、一方に「共同生産社会」を想定して私的所有(分業)のもとの労働時間配分の為に貨幣を要請する説明は「共同生産社会」が(貨幣の生成)の論理のうちにとりこまれないかぎり貨幣が労働時間配分において果している役割は説明しえても(貨幣の生成)は説明することはできない。<資本論>では「私的労働」の「社会的労働」への転化ということの内容は貨幣が理論的

に獲得されて後、4節、物神性論で与えられている。〈批判〉での次の叙述は（貨幣生成）の論理の混乱を示すものであると同時に〈資本論〉での整備された展開を予示するものといえる。「商品界には発達した分業が前提されている。あるいはむしろ発達した分業は特殊的な諸商品として相互に対立するところの・そしてそれらには同様に多様な労働様式がふくまれているところの・もろもろの使用価値の多様性のうちに直接にみずからを表わしている。だがかかるものとしての分業は商品の見地からすればかつ交換過程の内部ではただその結果のうちにのみ商品そのものの特殊化のうちにのみ実存する。」（私的所有・分業）⁽⁴⁰⁾が指定されてから——貨幣が理論的に獲得されてから——「私的労働」の「社会的労働」への転化の内容が与えられるのである。

〈貨幣としての章〉に比して〈批判〉での矛盾の指摘の深化とはいかなるものであろうか、価値関係と現実の商品交換との矛盾（相違）を指摘して（貨幣の生成）を説明するというのが〈貨幣としての章〉での方法であった。この価値関係の確定のためには例えば棉花の所有者と油の所有者はお互の欲望を充足しあえるということで際合しているということが前提であった。しかし〈批判〉の次の指摘はこの前提をとりはずすことによって生じるものである。「一商品は他の商品の所有者にとってはそれが彼にとって使用価値であるかぎりでのみ商品となりそして一商品はその商品じしんの所有者にとってはそれが他人にとって商品であるかぎりでのみ交換価値となる。」⁽⁴¹⁾この点が〈貨幣としての章〉に比して〈批判〉で深化しているところである。

このことは逆にいえば価値関係を確定せしめた前提のもとで（貨幣の生成）を説くことはできないということを示している。〈批判〉では「価値方程式」の拡大された形態が叙述され、この拡大された形態から「1エルレのリンネルの交換価値が2分の1ポンドの茶、2ポンドのコーヒー、6エルレの更紗あるいは8ポンドのパンなどでじぶんを表現するとすればその結果として、コーヒー、茶、更紗、パン、などはそれらが第3の一商品リンネルに等しい比率において互に等しくしたがってリンネルはそれらの諸商品の交換価値の共通の尺度として役立つのである」⁽⁴²⁾と述べるのであるがリンネルが引受けている役割はすべての商品がまた同様に引受けるものであることを続いて述べている。⁽⁴³⁾

三

<批判>から<資本論>へ（貨幣の生成）の説明は変更されることなく深化される。1章3節の価値形態論と2章の交換過程論はこれまでの展開の整備を示すものである。3節では価値関係の確立を説き⁽⁴⁴⁾2章ではかかる関係のもとでの商品所有者の行動を説いている。<初版>の形態四での「一般的な等価形態はつねに他のすべての商品に対立して一つの商品のみが受けとる、しかしそれは他のすべての商品に対立する各商品が受けとるのである。」⁽⁴⁵⁾という叙述は「理論的なもの、考えられたもの」からは「諸商品が全般的にその価値を表示する一定の商品」だけを除外することはできないということを示している。この点は<批判>と同様である。（再版）においても一商品亜麻布が一般的等価形態の位置を得ることは、すなわち方程式の逆転は「実際上一人の男がその亜麻布を多くの他の商品と交換したがってその価値を一連の他の商品の中に表現するとすれば必然的に多くの他の商品所有者もまたその商品を亜麻布と交換したがって彼らの種々の商品の価値を同一の第三の商品すなわち亜麻布で表現しなければならぬ。」⁽⁴⁷⁾というように「社会的結果」としなければならないのである。すなわち「一般的等価形態は価値一般の形態である。したがってそれはどの商品にも与えられることができる。」⁽⁴⁸⁾ということである。したがって一商品だけが一般的等価形態の位置を占めるためには「社会的結果」として、商品所有者の「考える前」の行動として説かれざるをえない。⁽⁴⁹⁾

<資本論>と<批判>との重要な相違は「労働の二重性」の把握の相違のうちにもみることができる。<批判>では1章の前半（商品の分析に関する学説史より前の部分）では「労働の二重性」はたんに「交換価値が労働時間によって規定されることを理解する……」ことにおいてのみとりあげられ後半での「古典派経済学の一世紀半以上にわたる諸研究の批判的な成果」は、前半部分の（貨幣生成）の説明にはとり入れられていない。しかしながら<資本論>では次のような自信のある叙述としてあらわれるのである。「商品に含まれている労働の二面的な性質は私をはじめ批判的に証明したのである。この点が跳躍点であってこれをめぐって経済学のあるのであるからこの点はここでもっと詳細に吟味しなければならない。」⁽⁵⁰⁾としてまず商品それ自体から「具体的有

用労働」を商品交換から「抽象的労働」を得るのであるがこのことは「商品の価値をその使用価値から区別することは、あるひは使用価値を形成する労働をば単に人間的な労働力の支出として商品価値に計算されるかぎりでのその同じ労働から区別することは比較的容易な⁽⁵¹⁾」ことであり従来、人は「商品あるひは労働を一方の形態おにいて考察するときは他方の形態においては考察せずまた逆の場合は逆の」考察をなしてきたのである。マルクスにとって経済学批判の跳躍点となったのはこの労働の二面的な性質を統一的に把握することによってであった。そしてこれは価値形態論でなされている。前述している「不充分的な点」の解決はここで与えられる。

マルクスは「亜麻布20エレ＝上衣1着または＝20着またはx着」というような方程式の基礎には「亜麻布＝上衣⁽⁵²⁾」が存するというを指摘する。これはたんに亜麻布と上衣は、その使用価値を異にするから交換されるということだけではなくその交換内容に特別の性質が存していることを示している。亜麻布と上衣とがその使用価値を異にするということによって交換されるということであれば「人間が社会的な存在」であるということからの交換がおこなわれているということであり亜麻布生産者の労働と上衣生産者の労働はその生産物の使用価値によって評価されているということでありそこでは人間本来の結びつきが形成されているということになる。しかし亜麻布（生産者）所有者はある第三者（抽象的労働）によって亜麻布を評価して上衣を欲するのであるから上衣生産者の労働は「抽象的労働」に還元されそのことによって亜麻布生産者の労働も「抽象的労働」としてその内実を空疎にされる⁽⁵³⁾。したがって「ブルジョア経済——そしてそれに対応する生産の時代——においては人間内奥のこの完全な創出はそれを完全に空にすることとして現れこの普遍的对象化は総体的疎外として現れ⁽⁵⁴⁾」る。交換価値の措定は価値関係の措定ということでありそれは商品所有者の行為をとうして展開されていることはすでに述べたとおりであるがその商品所有者は二面的な性質を有するものとしてここに措定されることになる。これは価値関係のにない手としての人間とその価値関係を否定する潜勢力を有している人間というかたちで措定されているということである。

さて残された問題は競争の基礎規定がこの関係のうちに与えられているかと

いうことである。この点に関連してまず深町教授の展開をみておこう。

ブルードン批判は「リカードの市場価格論を援用してなされるところの労働量による価値規定法則が市場の競争、すなわち供給・需要の変動を通じてのみ実現されるという競争の強調」によってなされる。他方、私的所有（分業）——交換という体制把握のもとに「そこでの競争のもたらすものが個人的労働の社会的・一般的労働としての措定であるという視角が確立され」この視角は「商品の二重性視角」のうちにもみられる。すなわち「現実の競争におけるいわゆる価値と（市場）価格の『現実的区別』といわれていたところのものが商品論そのものの次元に抽象化されて交換を通じての個人的労働の社会的・一般的労働としての措定という問題が抽出されそれとの必然的な関連において商品の二重性視角が展開されている」⁽⁵⁵⁾ここでの「商品の二重性視角」とは本稿での展開では「価値関係と現実の商品交換の相違（矛盾）」にあたるものである。たしかに教授の展開されているとおり「構成された価値」の適用による金・銀の交換可能性の状態にあるということからすべての商品を金・銀の地位に引き上げよという主張に対する批判から「個人的労働の社会的・一般的労働」への転化という視角は引き出されるがこの視角は＜資本論＞では（貨幣の生成）の論理には使用されていない。この視角は労働時間の配分における貨幣の役割を明らかにしても（貨幣の生成）の論理には、とりこまれず、したがって「叙述の仕方」とは区別された「深求の仕方」にかかわるものといえるであろう。「叙述の仕方」に関してみるならばその出発点の価値関係のうちに競争の基礎規定が与えられているかということであった。⁽⁵⁶⁾

本稿ですでに展開されていることは(一)亜麻布の（生産者）所有者Aと上衣の（生産者）所有者Bはお互の欲望を充足しあうことができるという認識のもとに際会している。(二)AとBは（それぞれある第三者を念頭にして）長い商議の末、交換比率の決定をみる。(三)Aの側からみると上衣は直接交換可能な状態にあるといえるしBの側からみると亜麻布は直接交換可能な状態にあるといえることができる。しかし(四)交換比率はAとBとの商議によって与えられるのであるから「亜麻布20エルレは上衣1着に値する」という表現はAの側からの表現であり量的規定に関してはBの側からの訂正を受けているということになるであ

ろう。したがって「上衣が亜麻布と直接に交換しうる形態にあるという独特の属性を得るとしてもこれによって決して上衣と亜麻布とが交換され得る割合も与えられているというわけではない」「上衣の価値の大いさは相変らずその生産に必要な労働時間によってしたがってその価値形態からは独立して決定されている。」⁽⁵⁷⁾ということになる。そしてこの叙述のうちに価格形態の特徴をみてとることができる。Aの主観的評価による量的規定はBによって訂正され、それは等価形態の地位にある商品（貨幣）によって訂正されるということである。競争の基礎規定もこのようにして出発点の論理うちにみられる。

さて価値形態論の課題は(-)(-)でのA・Bの行為を通して一般的な価値関係の措定をおこなうということであった。AとBの間の関係が一般的であるというゆえんは第三者の実体を一般的抽象労働としたことにあった。「抽象的労働」と「具体的労働」という範疇によって社会的に規定された人間が措定され「近代市民社会」の基礎<人間と人間の結びつきの内容>が明らかにされた。

AとBの間の関係を個別的で偶然的なものとして価値形態の発展を展開し一般的な関係<貨幣>を導出するとい方法はマルクスにあっては一般的な関係をまず与えて、そして時間の流れに照応させるわかりやすい教師風の説明としてとられたものである。

もしも、AとBの個別的で主観的行為としてこれを展開するならば彼らはお互に損をしていない、お互に利益を得ているということを共通に各自が感得をしているという以外にはAとBを結びつけるものは得られないであろう。⁽⁵⁸⁾したがって、貨幣はたんに物々交換の困難を回避するものとして考えだされたものということにならざるをえないであろう。

(1) 深町郁弥「経済学批判要綱における貨幣論」（『経済学研究』第30巻2号所収）2頁

(2) マルクス『経済学批判』（宮川訳青木文庫）21頁

(3) 「アネンコフ宛てのマルクスの手紙」（『哲学の貧困』、所収、山村訳）252頁

(4) 「かれらの（青年ヘーゲル派）空想によれば人々の諸関係、人々のあらゆるふるまい、人々の桎梏と制約はその人々の所産であるから、青年ヘーゲル派が人々に人々の現にもつ意識を人間的な批判的な、あるいは利己的な意識にとりかえよ、そしてそれによってかれらの制約をのりこえよ、という道徳的要請を課すのは、首尾一貫したこ

とである。意識をかえよ、というこの要求は現にあるものを別様に解釈せよ、すなわちある別の解釈によってそれを認めよという要求にゆきつく。」（『ドイツ・イデオロギー』花崎訳）28頁。ここでの「青年ヘーゲル派」をブルードンと置換えるとそのままブルードン批判として通用する。

- (5) (前掲書・山村・) 53頁
- (6) 「マルクスの観たブルードン」(前掲書訳所収山村, 訳) 232頁
- (7) (前掲書・山村訳) 例えば54~55頁
- (8) リカードの見解とローダデルの見解を並存させているということによってそれを知ることができる。(同上, 36頁, 100頁) マルクスが主観価値説を拒否した理由は推測であるがリカードの労働価値説を評価した点に存するであろう。すなわち理論のうちに想定される人間ということに関連しているであろう。その徹底化としてかつて『経済学ノート』では現実を無視しているとして拒否されたリカードの抽象次元での価値規定がこの段階ではその価値規定から現実の価格変動を説明しなければならなくなった。
- (9) 同上52頁
- (10) 同上79頁
- (11) 「アネンコフ宛てのマルクスの手紙」同上, 262頁
- (12) 同上, 30頁
- (13) 同上, 28頁
- (14) マルクス『資本論』(第1分冊・岩波文庫・向坂訳) 147頁
- (15) (前掲書・山村訳) 44頁
- (16) マルクス『経済学ノート』(杉原・重田訳) 60頁
- (17) (前掲書・所収・山村訳) 261頁, (前掲書・向坂訳) 163頁註38, 交換過程論にこの註がみられることは本稿の展開から理解されるであろう。
- (18) ミーク『労働価値論史研究』(水田・宮本訳) 179頁
- (19) 『経済学批判要綱』(高木・監訳) 1頁
- (20) 「マルクスは国民経済学が対象としていた資本制生産の諸事象, 諸法則を理解するために基礎概念としてあるいは主語として疎外された労働をもってすることを主張しながらも疎外された労働が主語である理由, 基礎概念である理由を何ら論証せずにア・プリオリにそれをいうのである」(「批判としてのマルクスの思想体系的方法的基盤」赤羽裕45頁(思想・1969年6号所収))
- (21) 『経済学・哲学草稿』(城塚・田中訳・岩波文庫) 105頁。
「経済学批判」ということに関してエンゲルスとマルクスの「私有財産」と「競争」の把握の相違は極めて重要である。

マルクス経済学に対する批判は「科学」の名において細分化することからはじめられる。『資本論』1巻は哲学, 社会学が, 2巻3巻及び『剰余価値学説史』では経済学がとりあつかわれているとするのである。そして次にはその分析用具はもうすでに

古くさくなっているとして死亡宣告をマルクス経済学に与えるのである。(例えばシュムペーターの『経済分析の歴史』)

- ② 前掲書(高木監訳) 22頁
- ③ 「マルクスがここで(『ドイツ・イデオロギー』第1章——引用者)とくに考察をはらっている点は理論の出発点となる前提はなにかという点である。すなわちその出発点となるものは、あたえられた物質的生活諸条件、すなわち生産諸力、諸資本、社会的交通諸形態などの総和のもとにある現実的諸個人とその活動である。マルクスの場合理論的考察がそこでおこなわれる世界また理論的考察をさしむけるべき対象は所与としての歴史的に特定の・現実的な連関である。人間的諸個人はそれら連関の一定の機能のいない手であると同時にその連関に否定的に対処しうる潜勢力のいない手であるという具体的統一——それが人格性の内容をなす——のすがたにおいて位置づけられる。」「マルクスにおける人格の概念は直接的には人間の素質としてあたえられた創造的な諸潜勢力であり人間の人格的なありかたというのは自然的諸力と人間自身の潜勢的諸力能の自由な発展を可能にするようなありかた、それらを目的意識的に支配し制御するような社会的ありかたのことである。」『マルクスにおける科学と哲学』(花崎泉平119頁。89頁)すでに獲得されている理論的枠組の内容は花崎氏に依拠している。
- ④ 前掲書(高木監訳) 61頁
- ⑤ 前掲書(山村訳) 15頁
- ⑥ 前掲書(高木監訳) 64頁
- ⑦ 同上64頁
- ⑧ 同上63頁
- ⑨ 同上62頁
- ⑩ 同上125頁
- ⑪ 花崎泉平・前掲書158頁
- ⑫ 前掲書(高木監) 408頁
- ⑬ 同上78頁
- ⑭ 同上141頁
- ⑮⑯ 福富正美『共同体論争と所有の原理』197～210頁
- ⑰ 前掲書(高木監訳) 91頁
- ⑱ 前掲書(宮川訳) 31頁
- ⑲ 同上54頁
- ⑳ 同上62頁
- ㉑ 同上51頁
- ㉒ 同上45頁
- ㉓ 「一定分量の一般的労働時間としての各々の商品(左項)はその交換価値を順次にすべその他の諸商品(右項)の使用価値の一定分量で表現する。

$$A \text{ 商品 } X \text{ 量} = B \cdot Y \quad B \cdot Y = A \cdot X \quad C \cdot Z = A \cdot X \quad D \cdot W = A \cdot X$$

$$\begin{array}{cccc}
 = C \cdot Z & = C \cdot Z & = B \cdot Y & = B \cdot Y \\
 = D \cdot W & = D \cdot W & = D \cdot W & = C \cdot Z \\
 \vdots & \vdots & \vdots & \vdots
 \end{array}$$

そしてすべての他の諸商品の諸交換価値（左項）は逆にこの除外された一商品（右項）の使用価値でじぶんを測定する。

$$\begin{array}{cccc}
 B \cdot Y = A \cdot X & A \cdot X = B \cdot Y & A \cdot X = C \cdot Z & A \cdot X = D \cdot W \cdots \\
 C \cdot Z = & C \cdot Z = & B \cdot Y = & B \cdot Y = \\
 D \cdot W = & D \cdot W = & D \cdot W = & C \cdot Z = \\
 \vdots & \vdots & \vdots & \vdots
 \end{array}$$

だが交換価値としては各々の商品（右項）はすべての他の諸商品の諸交換価値の共通の尺度として役立つひとつの除外された商品であるとともに他方では各々の他の商品が多数の諸商品の全範囲（左項）で直接にその交換価値を表わすばあいのその多数の諸商品のなかのただひとつのものである。」（（ ）及び等式は引用者）

同上 45頁

- (44) 「吾々はリンネル生産者Aと上衣生産者Bとのあいだの物々交換を考えてみよう。彼らが取引について意見が一致する前にはAは20エルレのリンネルは2枚の上衣に値すると云ひこれに反してBは1枚の上衣は22エルレのリンネルに値すると云ふ。最後にながく商議したのち後は同じ意見になる。Aは20エルレのリンネルは1枚の上衣に値すると云ひそしてBは1枚の上衣は20エルレのリンネルに値すると云ふ。この場合には双方がリンネルと上衣とが同時に相対的価値におよび等価形態にある。しかしその然るのは——注意せよ——全く同時に出現するところの2人の異なる個人にとっておよび2つの異なる価値表現においてである。」（初版長谷部訳岩波文庫）139頁 価値関係の確立の具体的背景を知るうえで上述の部分は好適である。（貨幣としての章）においても価値関係に言及するまえに上述の部分と同じ内容の「物々交換」の例を引いている。（前掲書・高木監訳64頁）「最後にながく商議して」という場合ABともに自らの家計（再生産）を省みてならんかのもの（第三者）を念頭において交換比率を決定する。A、Bともに主観的には自らの利益を得たと感得するわけであるが彼らの意図をこえたものとしてこの第三者は与えられていることから逆に彼らは規制されているということになる。

次に「20エルレのリンネルは1着の上衣に値する。」という表現はAの側からの表現であり方程式を逆にすることはBの側からの表現をおこなうということになる。

(45) 同上87頁

(46) 同上45頁(47) 前掲書（向坂訳）126頁

(48) 同上134頁

(49) 価値一般と現実の商品交換の相違（矛盾）を以下の叙述はよく示す。

「商品所有者を特に商品から区別するものは商品にとってはすべての他の商品体が

ただ自分の価値の現象形態と考えられるにすぎない。商品に欠けているこの商品体の具体的なるものに対する感覚を商品所有者は彼自身の五感乃至六感で補うである。」

(同上164頁)

お互の欲望が充足しあえるという認識のもとに商品所有者が際会しているという価値形態論での前提が交換過程論ではとりはずされねばならないということ。

50) 同上83頁

51) (初版長谷部訳) 59頁

52) 前掲書(向坂訳) 98頁

53) 「リンネルをして使用価値たる上衣に関係させるものは上衣の羊毛からくる快適さでも上衣のボタンをかけた体裁でもそのほか上衣を使用価値たらしめる或る何等かの有用的な質でもない。上衣はリンネルに対してはただリンネルの価値対象性をばリンネルのざらざらにした使用価値対象から区別して表示するために役立つにすぎぬ。だから裁縫労働がリンネルに対して効果をもつのもそれが合目的生産的な活動であり有用な労働であるかぎりにおいてではなくただそれが規定された労働と人間的な労働一般の実現形態であり対象化の仕方であるかぎりにおいては過ぎぬ。」

(初版 長谷部訳) 58頁

54) 前掲書(高木監訳) 421頁

55) 深町, 前掲書11~18頁

56) 労働時間の量的規定の変遷について, 高木幸二郎「商品の価値と価格」(飯田繁記念論文集所収)

57) 前掲書(向坂訳) 110頁

58) 「お互が利益を得る」という主観的評価はお互が欲望を充足しあったということに基づくからAとBの結びつきは欲望を充足しあうということにある。マルクスはプルドンを批判して欲望を充足しあう為に交換がおこなわれるということは循環論となるから交換価値の発生を説明することはできないと云っている。実際プルドンは天上来よりその範疇を引き出している。前掲書(山村訳) 14頁。